
明日咲く花、今日開く夢

きよこ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

明日咲く花、今日開く夢

【コード】

N0812D

【作者名】

きよこ

【あらすじ】

私はぼんやりと庭を眺めるのが好きだった。その庭の片隅に幽霊のように現れたのは、サンタと名乗る奇妙なじいさんだった。【ギフト企画参加作品です】

(前書き)

この作品はクリスマスギフト企画の参加作品です。
「ギフト企画」で検索すると、たくさん素敵な作品が読めます。

明日咲く花、今日開く夢

たとえば、変わらないものがあるとしたら。
永遠に続くものがあるとしたら。
変わらないことで、変わることがあるのだろうか。

針でちくちくと刺されるような冷たい空気。

うつすらと靄がかかったまとわりつくような寒気。

どんよりとした重い雲が空を覆いつくし、もしかしたら雨が雪が降りそうな、そんな天気。

家の中は外の空気と同じように張り詰め、暗い。明かりはまだ灯らない。

私はぼんやりと縁側に座っていた。

この家の主、みつちゃんは庭いじりが好きで、私の目の前に広がる四畳半にも満たない小さな庭に、たくさんの木や花を植えている。だが、冬に咲く花はほとんど無い。

生気のないしおれた草花が花壇を覆い、家の境目に植えた木が茶色くなった葉をカサカサと鳴らす。黄土色の絵の具だけで描いたみたいな庭。

唯一冬に咲くサザンカは、ここ数年花をつける回数も少なくなり、今年にいたってはすっかり元気をなくして枯れかかっている。

そんな寂しさ漂う庭だけど、私はぼーっと眺めているのが好きだ。

季節は移ろう。春には春の、夏には夏の、秋には秋の、冬には冬の、その時にしか見せない顔がある。今はこんなになってしまった庭だけど、毎年毎年違った顔を見せ、私の心を和ませてくれる。

ずっとずっとここで、それを見ていられたら。なんて幸せなんだろう。

「お嬢さん」

少し寒くなってきた、裸足の足をかばうようにあぐらをかいた時だった。

庭の片隅に、奇妙奇天烈な人間が、突如姿を現したのだ。

いつからそこにいたのだろう。枯れたサザンカの木の前に、真っ赤な服を身にまとった小太りのじいさんが、作り笑いのような薄気味悪い笑顔で立っていたのだ。

「泥棒がいる」

「いや、あのさ、こんな格好の泥棒いないからね」

真っ赤な格好をしたそのずんぐりむっくり体型のじいさんは、丸いメガネをくいくいと人差し指で直しながら、私の元に歩み寄ってきた。

「みっちゃん！ 泥棒がいるよ！」

「サンタクロースだから！ サンタ！」

じいさんは慌てた様子で私のもとに走り寄り、私の口を手で塞いだ。

赤い手袋についた白いモアモアが鼻をくすぐり、私は思いつきりくしゃみをかます。鼻水がじいさんの手袋についてしまった。

「汚いんですけど」

「そのモワモワした服が悪い」

じいさんは顔をしかめ、細い目をさらに細くして私を睨んできた。今この人、自分のことサンタって言った？ 三太の間違いじゃなくって？

「メリークリスマス！ サンタさんがプレゼントをあげるよ！」

そう言っつて、自称三太は両手を大きく振った。ぶちぶちと洋服の糸が切れた音がしたのは聞こえなかったふりをしておいてあげよう。すっかり忘れてたけど、今日はクリスマスなんだ。

「私が知ってるサンタは赤い服じゃない。赤い服のサンタはある企業の広告により生まれたわけで、正式なサンタは赤くない。つまりあんたはサンタじゃない。というわけで、帰れ」

「なにそのトリビア。おじちゃんの言っつてること総無視？」

「リストラにあつて仕方なくサンタやつてるケーキ屋アルバイトのじいさんなんでしょ？ 帰れ」

「ひどくない？ おじちゃん、サンタなんだけど、まじで」

「かわいい女の子をひっかけるためにサンタの格好でナンパしてる、いい歳こいて露出狂のおっさんなんでしょ？ 帰れ」

「露出一切してないじゃん！」

胡散臭いくらいに伸びた白い髭は、この家でなぜか額縁に入れて飾られている大昔の紙幣を思い起こさせた。ひげが二股に割れている偉人、板垣退助が脳裏をよぎる。

いや、板垣退助に失礼か。このサンタの格好をした、いかがわしいじいさんはこれでもかというタレ目の細目で、にやけた薄い唇はエロオヤジそのものだもの。

「サンタさんがクリスマスの夜に何の用？ 売れ残りのケーキなら

「いないから」

「だから、リストラにあつて仕方なくサンタやってるケーキ屋アルバイトのじいさんじゃないからね」

「じゃあ、毎年クリスマスになると『プレゼントくれよ〜！』って言われていじめられる、親に文句のひとつも言つてやりたい名前を付けられたかわいそうな三太なんですよ」

「サンタ違いだからね、それ」

「じゃあ、なんなの。」

色んなところで描かれているサンタの姿そのままだけど、サンタなんているわけない。

「おじちゃんはお物のサンタで、本当に欲しいものがある子のところにだけプレゼントを届けてるんだよ」

「本物のサンタだって証明はあるの？ トナカイもそりも無いじゃん」

サンタと言えばトナカイとそりだ。あれをシャンシャン言わせて登場するのがサンタであつて、いきなり庭の片隅に幽霊みたいに現れるやつをサンタとは言わない。

「そのTIMESに停めて来たから、ここには無いよ」

「TIMESって駐車場だよ……」

「一応乗り物だからね。また駐禁くらつたら、おじちゃん免停なのよ」

トナカイに乗るのに、免許いるんだ……。しかも何回駐禁くらつたの？ ますますうさんくさいんですけど。

「ほれ、プレゼントあげるんだから、とりあえず信用しなさい。本

当に欲しいもの、あるじゃろう?」

「本当に欲しいもの?」

「そう、本当に欲しいもの」

そう言つて、じいさんにはつこりと微笑んだ。ほっぺがまあるく
なつて真つ赤になる。こんなサンタのポストカードをどこかで見た
ことがある。

「欲しいもの……」

「何でも言つてごらん?」

あ、なんだか、このじいさん、えびすに似てる。ビールの。

「永遠の命がほしい」

「なにその魔王っぽい発想」

「だめなの?」

「だめじゃろ」

「だめなのか……」

ううん。一番欲しいものだったのに。

「じゃあ、何もいらない」

「まじで? 欲深いんだか欲が無いんだかわからんお嬢さんだね」

じいさんは縁側にどさりと腰を下ろしたが、床がひんやりと冷た
かったのだらう。すぐに腰を上げ、私をちらりと見た後、また座つ
た。

霜が降つたように白くなつた床はじつとりと冷たいはずだ。じい
さんはやせ我慢しているのか、引きつった笑みを浮かべて、また私
に目を向ける。きもい。

「お嬢さん、寒くないのかい？」

そう言われて、初めて自分が寝巻き用の着物とひざかけという肌寒そうな格好だったことに気付く。寝起きのままだった。

「少しはね。慣れたよ」

「どうしてこんなところにずっと座っているんだい？」

「ここが好きだからだよ」

「どうして好きなんだい？」

どうして？ 好きに理由はいらないじゃない。私はここにいるのが好きなんだ。放っておいてよ。

「お嬢さん、いつからここににいるの？ いつまでいるの？ 風邪引くよ」

おせつかいなじいさんだ。私はじいさんを無視することにして、あぐらをかいた膝に肘をつき、そのまま頬杖をする。

少し冷えた手にホッと吐息を吹きかけると、指先がじんじんと疼いた。

「ねえ、サンタのじいさん」

「なんだい？」

「私が欲しいもの、わかる？」

「永遠の命って言ってたじゃろ」

「そう、永遠が欲しいの」

乾いた土は灰色。空はどんより真っ黒。この庭の草木はぐったりと土気色。

どうしてこんな色に染まってしまったのだろう。
ここには、暗くにこった淀みしかない。

「おじちゃんには、永遠はあげられないよ」

「しょせんサンタと言ってもその程度か」

「お嬢ちゃん、やっぱり魔王でしょ？」

いつからこの庭から煌くような生気が無くなってしまったのだろう。
う。

みつちゃんの大事にしていた庭が、どうしてこんな姿になってしまったのだろう。
まったのだろう。

私の大好きな庭は、今、死のうとしてる。

「あのサザンカに永遠をあげてよ」

「いや、だからね、永遠とか、無理！」

「話は最後まで聞け」

「はい、すみません」

じいさんが素直に謝ったから、私は「ふんっ」と鼻息を吐いて、
すぐに続きを話す。

「ずっとじゃなくていいの。この家にみつちゃんが戻って来るまで
でいいの。あのサザンカが咲いたら、きつとみつちゃんは帰ってきて
くれる。みつちゃんが戻ってきて、庭の手入れをしてくれたら、
この庭はまた活気付くよ。そしたら、サザンカにとっては永遠じゃ
なくても、この庭に永遠が戻ってくるの。だから、サザンカを元氣
にしてよ」

みつちゃんが植えたサザンカ。

冬に咲く、白い花。真っ白な花卉を大きく開き咲き誇る。

みつちゃんは、サザンカが大好きだった。あの白い花が咲くと、この縁側に座り、ずっとじっと眺めてた。

私はみつちゃんの横で、ほのかに甘い香りがつんと鼻腔を通り抜けていくのを感じていた。

今でも思い出す。あの香りと、みつちゃんと見た、白い清廉な花。

冬の寒さの中で、それでも艶やかに咲く花は、みつちゃんにとって世界一の花だった。

だから、きつと目印になる。

「そのくらいなら、能無しのサントのおじさんにも出来るでしょ」

「恐ろしいくらい上から目線なのね、お嬢さん」

じいさんは寒そうに両腕をさすって立ち上がり、そっと枯れたサザンカに手を触れた。その一瞬、まるで春の陽光のような、秋の木漏れ日のような温かな光が波打った。

空気を震わすそれは、私の体を貫いてとくんととくんと波紋を広げてゆく。

そうだ、この音は。

生命の吐息の音。

どこか懐かしく、温かく、そして、なぜか哀しい。

失われた、優しい音。

「お嬢さん、欲しいものは確かに贈ったよ」

「花はいつ咲くのかな？」

「明日には咲くよ」

じいさんはくもったメガネをキュツキュツと赤い手袋で拭きながら、私の手を取った。目を細め、柔らかな笑顔を私に向けてくれる。

「まだ、ここに居るかい？」
「うん。だってここは、私の家だから」

サンタのじいさんは小さく肩をすくめると、頭にかぶった間抜けな赤い三角帽子を脱いで会釈した。おお、見事につるっばげ。私の視線に気付いたのか、じいさんは慌てた様子で帽子をかぶり直し、「じゃあお元気で」とウインクした。

じいさんの姿は、雪がいつの間にかとけてなくなっていくみたい
に消えていった。

私は頹杖をついたままそれを見送り、大きく息を吐き出す。
なんだか、ちよつと寂しい。口から自然に歌が零れだす。
そつと口ずさむ、クリスマスの歌。

ねえ、サンタさん。

この庭を愛した人は、私を残してどこかへ行ってしまった。
本当はわかってるの。もう帰ってこないこと。

だけど、ずっと過ごしてきたこの場所から、私は離れられなかつた。

みっちゃんは腰の曲がったおばあちゃん、私はみっちゃんに気
付かれることはないのに、それでもずっとそばにいた。

小さいころに死んだ私は、この場所を百年二百年と守ってきたか
ら。

たくさんの方がここで生きて死んで、そして、みっちゃんが最後
の人になってしまった。

私はひとり、息吹を無くし消沈するこの庭をただずっと眺めてい
たの。

だって、私には何も出来ないから。

見ているしかなかった。

誰かがまた、ここに命の花を咲かせてくれる日をずっと待っていた。

サンタさん、しょうがないから感謝するよ。

ねえ、もし、もしも。

明日咲く花を見たら、この暗い家に光はもたらされるだろうか。

今日口ずさむ歌が、あの花に届いたら。

きれいに咲いて。鮮やかに咲いて。

そして誰かが、あの花に気付いてくれたら。

この家に、誰かが帰ってきてくれたら。

そうして、笑顔が戻ってきたら。

私はまた、誰かの新しい生活が健やかになるように、平穩であるように、見守っていくだろう。

命の循環は変化をもたらすと同時に、永遠を作り上げる。

この庭に、みっちゃんが遺した命が戻ってきたら、きつと。

きつと、何かが変わる。

だから今日は歌い続けよう。

サンタさんからのプレゼントが、夢を伴って開かれると信じて。

明日咲く花が、私の夢を叶えてくれると、願いながら。

(後書き)

読んでくださり、ありがとうございました！

ちよっぴり笑ってちよっぴりじんとくる物語を目指してみました。
ギフトとしてもらっていただけただけの作品になったかはわかりませんが、
少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0812d/>

明日咲く花、今日開く夢

2008年8月29日17時12分発行